

目次

序章	3
1 韓国陶磁と近代	3
2 先行研究と本書の特色	6
3 本書の構成	10

第I部 東アジアの近代化と陶磁産業

第1章 近代日本の陶磁輸出——アメリカ、中国、朝鮮——	15
はじめに	15
1 輸出の始まりと粗製濫造	18
2 アメリカ	24
3 中国	35
4 朝鮮	42
小結	51
第2章 日本産業陶磁の朝鮮半島への進出	54
はじめに	54
1 朝鮮向け輸出	55
2 粗悪品問題	61
3 嗜好を探る	66
4 流通	76
小結	79

第3章 日韓両国内の陶磁生産の状況	82
はじめに	82
1 日本国内の生産状況——肥前——	84
2 日本国内の生産状況——愛知・岐阜——	104
3 韓国——窯業の衰退と近代化政策——	114
小結	125

第II部 高麗青磁の再発見とその再現

第4章 韓国陶磁研究の始まり	131
はじめに	131
1 西洋における収集と研究	132
2 姿を現す高麗青磁	136
3 コレクションの形成	149
4 日本人による研究	161
小結	176
第5章 高麗青磁再現史	178
はじめに	178
1 初期の試作	180
2 製品化	188
3 様式と再現技術	220
4 「再現」の多様性	230
小結	236

第Ⅲ部 朝鮮白磁の美の発見
——民芸運動の萌芽と韓国陶磁産業への展望——

第6章 朝鮮白磁の美の発見	249
はじめに	249
1 朝鮮白磁壺との出会い	250
2 柳宗悦	256
3 『白樺』『李朝陶磁器』特集号	266
4 「李朝」ブーム	272
小結	290
第7章 浅川兄弟の方法論と朝鮮民俗調査	291
はじめに	291
1 「陶片を読む」	293
2 近代茶人の勃興	299
3 方法論の確立と展開	306
4 近代朝鮮とフィールドワーク	325
小結	343
第8章 地方への視点——新たな陶磁産業への展望——	347
はじめに	347
1 産業の育成	349
2 地方窯での作陶	357
3 戦後に残された窯——高敞——	374
4 「真の工芸」	383
小結	390

補 論 学術調査と古陶磁ブーム	393
1 高麗青磁	393
2 金冠塚、楽浪、朝鮮白磁	399
3 「美の泥棒」	402
結 論	408
1 ジャポニスムから朝鮮市場へ	408
2 甲申政変と高麗青磁	410
3 「穏かに膨らんだ円い物」	412
あとかき	
謝 辞	
文献目録	
初出一覧	
索 引	

(凡 例)

- (1) 朝鮮王朝は1897年に大韓帝国と改称したのち、1910年の韓国併合によって最終的に消滅した。本書では、植民地期の地域名としては「朝鮮」、それをも含めた上位の概念としては「韓国」を使用する。また同様に、朝鮮王朝時代のやきもの、いわゆる「李朝」のやきものに対しては「朝鮮陶磁」、上位の概念としては「韓国陶磁」を適宜用いる。
- (2) 史料の引用文中に、今日から見て差別的と思われる表現が一部含まれるが、当時の社会状況を反映する歴史的意味があると考え、あえて原文のままとした。
- (3) 引用文中に丸括弧 () で示した部分は原注、亀甲括弧 [] で示した部分は引用者(鄭)による補注である。また読み易くするためカタカナはひらがなに直し、句読点を適宜補った。
- (4) 新聞をはじめとする戦前の稀少文献の一部は、韓国国立中央図書館「デジタル化資料」(http://www.nl.go.kr/nl/dataSearch/data_wm.jsp)、国立国会図書館デジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp/>)、欧文文献はInternet Archive (<https://archive.org/>) などを利用している。
- (5) 人物名については、すべて敬称を省略した。
- (6) 作品名については、作者本人によるものは鉤括弧「 」で示し、箱書があるものは箱書の名称を用いた場合もある。また本書において統一を図ったため各所蔵館の表記とは必ずしも一致しない。製作年については著者が新たに考察したものもある。
- (7) 法量の単位はセンチメートル (cm) として、書跡・絵画については、縦×横で示した。

序 章

1 韓国陶磁と近代

東アジアの近代は、外部から押し寄せてきた西洋諸国の圧力のなかで始まった。西洋諸国は圧倒的な軍事力を備えていただけでなく、高い技術力や学問、制度などに支えられていた。中国、日本、朝鮮王朝などは、まもなくこうした西洋の学問を必死で学ぶことになる。そして、とりわけいち早く近代化に成功した日本は西洋への窓口となり、東アジアから多くの留学生を引き寄せた。

ただし、この文化的接触は、東アジアが西洋から学ぶという一方的な流れのみを生み出したのではない。その反対方向の典型が、日本のデザインや美術を対象としたジャポニズムの潮流である。ある意味では前近代的ともいえる要素をもつ日本の伝統的デザインや美術が、その新鮮さゆえにアメリカや、またフランスをはじめとするヨーロッパに受け入れられ、ゴッホその他の芸術家にも影響をあたえた。さらに中国では、1911年の辛亥革命によって王朝が崩壊し、皇帝や王族のもとにあった第一級の美術品、工芸品が欧米に流出しはじめ、次第に声価を高めていく。

それでは、地理的に日本と中国との中間に位置していた韓国は、とくに美術、工芸上はどのような位置を占めるのだろうか。ここでやきものに問題を絞ると、韓国を代表する陶磁器が高麗青磁と朝鮮粉青・白磁であることは、あらためて言うまでもないだろう。現在、いずれも盛んに研究され、個人的なコレクションの対象としても人気が高い。ところが、近代的な学術研究はもちろんのこと、これらのやきものが収集され、鑑賞されはじめるのも、基本的に近代以降のことなのである。高麗青磁、朝鮮粉青・白磁とは一体どの

ようなものであり、どのような作品が優れた作品なのかなど、その評価と価値をめぐる体系が近代期に、とりわけ日本の植民地下で一挙に形作られていった。今日さまざまな美術館や博物館に所蔵され研究の基礎となっている各種コレクションも、このとき形成されたものであり、その典型が、アメリカのフリーア美術館が誇るアレン・コレクションである。こうして陶磁器の世界に、欧米にも中国にも日本にも存在しない、独自の美しさをそなえた高麗青磁、朝鮮粉青・白磁という新たな価値が登場した。

他方でこの時代は、韓国の窯業全般がしだいに衰退していく時期にあっていた。その場合とくに問題となるのは同時代の朝鮮白磁系統のやきものだが、それが衰えるということは、人々から求められなくなった、ということだろう。それにかわって迎えられたのが、日本で大量生産された粗製品だった。では人々はなぜそれまで使用していた自分たちの伝統的なやきものを捨て、日本からの外来品を受け入れたのか。この問題に答えるのは容易ではないが、少なくとも、人々のあいだになんらかの価値の変化が起っていた可能性がある。

ところがその流れに抗するかのように、浅川^{のりたか}伯教、巧の兄弟や柳宗悦は朝鮮白磁をはじめ高く評価し、工芸品としての価値をあたえつつ、一方でそのような実用品としてのやきものの再興を夢見ていた。このなかからまた、「用」と「美」とを同時に求めようとする、のちの民芸運動につらなる考え方も現れる。かれらにとって、用と美とは切り離せないものであった。とすれば今日の私たちも、それを分離することなく一体のものとして理解する必要があるだろう。19世紀中葉以降の近代化のなかで、韓国の陶磁器の世界に何が起こったのか。その経緯を産業陶磁と美術工芸品の両面から総合的に明らかにすることが、本書の課題となる。

東アジアの近代化にともなって陶磁器の分野に現れた最初の衝撃は、韓国の場合、さきに触れたように日本で大量生産された粗製品の流入だった。これによって、すでに衰退しかけていた在来の窯業がさらに追い打ちをかけられる。他方で、やはり近代化による鉄道をはじめとする各種土木工事にとも

なって大量の高麗青磁が出現し、欧米や日本で高く評価される。在来窯業が衰退するなかで、同時にかつての陶磁器への評価が高まったのは皮肉なことだった。

このとき、高麗青磁と朝鮮粉青・白磁のいずれにおいても「発見」と「評価」の現場に日本人が深く関与し、陶磁器をめぐる日韓関係史を形作っている。その動向をここであらかじめ略述しておこう。

最初に人々の注目を集めたのは高麗青磁だが、日本での高麗青磁研究は、やまよしもりよし山吉盛義が自身のコレクションにもとづいて1900年に世界で初めての高麗青磁の図録『古高麗美痕』を刊行したあたりから始まる。

また日本の産業陶磁の面では、森村組の日本陶器合名会社が1912（大正元）年ごろに純白磁器を完成させ、ほぼ世界の最先端に追いついた。この陶磁器がそのまま朝鮮半島に流入するわけではないが、このころまでに日本の産業陶磁の力が圧倒的なものとなり、韓国の在来窯業は交通、すなわち運搬の不便な地方にわずかに生き残るのみとなる。

1910年には、韓国併合によって日本が朝鮮半島を植民地化した。これに先立つ統監府時代から植民地時期にかけて、韓国の窯業は産業面、工芸面のいずれにおいても、主に日本人の主導のもとに近代化を模索することになる。浅川伯教が朝鮮半島に渡ったのは（1913年）、まさにこのような時代であった。こののち、高麗青磁研究の進展、高麗青磁再現品の製作、朝鮮粉青の再評価、白磁の「発見」と続くなかで、韓国陶磁の世界は大きく広がることになる。だがその過程は一方で、日本人のあいだに繰り返し古陶、古物ブームを引き起こし、古墳の盗掘や遺物の日本への流出という文化破壊をもたらす。日本人コレクターや考古学者の多くは、珍しいもの、美しいもの、考古学的に価値のあるものの発見や収集のみに夢中になったのだった。

しかし例外的に、そうした古物や工芸品の背後にいるはずの、それらを作った人々、また今も作り続けている人々とその暮らしに目を向けようとする日本人がいた。浅川伯教、巧兄弟と柳宗悦である。かれらの活動はやきものの分野に止まることなく、まもなく日本で、いわゆる「民芸運動」という大き

な潮流を生み出す。この運動は、近代的な工場で大量生産される商品に抵抗しようとする側面を備えており、浅川兄弟も、まさにそのようなものに反感を持っていた。近代の途上において、日本の大量生産品が韓国の窯業を破壊していく中で、それを批判する動きが、時間的には大きく遅れながらも、まさに韓国陶磁にたいする研究のなかから現れたのである。こうして、弟の浅川巧が若くして世を去ったのち、兄の伯教が一人で朝鮮全土を巡り、今は寂れた窯跡を調査し、そして在来窯の復興に力を尽くす道を歩むこととなる。

2 先行研究と本書の特色

日本の日用品的なやきものが明治以降どのように海外へ進出していったのかについては、先駆的な研究として奈良本辰也『近代陶磁器業の成立』があり¹⁾、近年になって宮地英敏がこれをさらに精緻化した²⁾。ただしこれらは主に欧米向けを対象としている。韓国向けの輸出状況に関してもっともまとまった研究は、片山まび「1870～1920年代韓国に輸出された日本産業陶磁器——生産地を中心に——」である³⁾。このなかで片山は、韓国の器を模倣した製品の生産が1878年から始まり、その輸出の歴史は日本窯業の近代化と軌を一にするものだったこと、1905年には韓国のサバル（飯碗）を生産しはじめたこと、1930年代には、それまでの肥前にかわって瀬戸・美濃が韓国市場を支配したこと、などを明らかにした。そして以上の過程を「具体的に究明すること」が課題として残されているとする。そのほか家田淳一や張南原の論考が発表されているものの⁴⁾、研究はまだごくわずかである。

韓国への陶磁器の輸出状況を知るうえでもっとも重要な史料は、おそらく外務省通商局の『通商彙纂』だが、これまで研究者に使用されることがなかつ

1) 奈良本辰也『近代陶磁器業の成立』伊藤書店、1943年。

2) 宮地英敏『近代日本の陶磁器業』名古屋大学出版会、2008年、289-297頁。

3) 片山まび「1870～1920年代韓国に輸出された日本産業陶磁器——生産地を中心に——」『東大門運動場遺跡東大門歴史文化公園敷地発掘調査』（以下、『東大門運動場遺跡』とする）中原文化財研究院、2011年（韓国語）。

あとがき

私は日本へ留学する以前に韓国で会社勤務を経験しており、通常よりもかなり遅れて研究の世界に入ることになった。韓国ではまず、かつて代表的な財閥のひとつだった大宇株式会社で貿易関連の仕事に携わった。仕事自体に不満はなかったが、忙しい時は徹夜が続くような職場環境だったため、3年後にはソウルから故郷に近い釜山に移り、やはり韓国を代表する家電メーカーであるLG電子に転職する。そして、30歳になった頃、大学の恩師から、京都橘大学の文化財学科が学費免除や奨学金制度を充実させて留学生を募集していると聞き、一度だけの人生であり、より専門的でやりがいのある仕事につきたいと思い、2002年に日本留学を決意した。そしてこの京都橘大学で弓場紀知教授（現・兵庫陶芸美術館副館長）と出会い、陶磁史という学問を知ることになる。大学3年生の頃、弓場先生の引率で初めて大阪市立東洋陶磁美術館の常設展を見学した。そこに並んだ何も装飾がない高麗青磁の瓶は、しかし、澄み切った灰青緑色の釉が端正な形をくまなく滑らかに覆い、その品格と美しさに驚いた。このときの衝撃を今も鮮明に覚えており、この出会いが陶磁史研究の道へ進む大きなきっかけとなった。

研究といっても、私は美学や芸術論といった抽象的なものよりも、具体的な物やそれを取り巻く歴史的背景により興味があった。そこで2006年に立命館大学大学院の考古学専修に進学し、木立雅朗教授のもとでさらに研究を続けることになった。当時、立命館大学では乾山焼の鳴滝窯跡発掘調査を終えたものの未整理の陶片が研究室にたくさん積まれたままになっていた。これらの陶片を、時には警備員の目を盗みながら深夜まで一人研究室で整理した。整理には一年半ほどかかった。この間、木立先生からは陶片の整理方法や、胎土、釉薬、焼成、製作技術といった多様な情報を陶片から読み解く方法に

ついて、さらにはそれらにもとづく成形実験などを、基礎から教えていただいた。このときの陶片整理によって、陶片にたいするある種の感覚という、陶磁研究者にとってもっとも大切なものの一つを身につけることができたように感じる。大変な作業ではあったが、私にとっては生涯の宝となるかけがえのない体験だった。また乾山焼を通して、特別展「乾山の芸術と光琳」(2007年開催)を準備中であった出光美術館の荒川正明先生(現・学習院大学教授)とも出会うことになる。出光美術館では、乾山焼を調査する機会を与えられるとともに、作品を扱う姿勢や心構えなどを身近なところで学ばせていただいた。立命館大学大学院時代には、さらに和田晴吾教授、高正龍教授、矢野健一教授という素晴らしい先生方、また先輩、同期、後輩に恵まれ、良好な研究環境のなかで陶磁史研究の道にさらに踏み込むことができた。

2008年には、幸いにもあこがれの大阪市立東洋陶磁美術館に就職が決まり、ここで伊藤郁太郎館長(現・同館名誉館長)に出会ったことが、私の研究生活、そして人生の次の大きな転機となった。一外国人留学生として永住権もなかった私に人生を変える機会を与えてくださったことは、どれほど感謝してもしきれない非常に幸運であった。伊藤館長は同じ2008年に退任されたが、学芸顧問という立場で特別に指導を受けることができた。とりわけ印象的だったのは、週に2、3回、一日中収蔵庫内で、同じ器形の作品を10個以上も並べ、真贋問題を含め、作品のさまざまな特徴を細かく観察したり、その美術的価値の優劣を判断したりする「特訓」を受けたことである。これが3年に及び、陶磁器を見る美的感性の基礎を養うことができたように思う。

大阪市立東洋陶磁美術館では、韓国陶磁担当学芸員としてさまざまな展覧会を企画、担当する幸運にも恵まれた。なかでも思い出深いのが2011年に開催した特別展「浅川巧生誕120年記念 浅川伯教・巧兄弟の心と眼——朝鮮時代の美——」である。韓国陶磁研究の先駆者であり、韓国の陶磁や工芸品をこよなく愛した浅川兄弟の歴史的背景を、ご遺族からの寄贈品にもとづきながら近代という大きな時間軸のなかで探ることを目的としたもので、これが私のその後の研究の出発点となった。この展覧会は美術館連絡協議会の大賞

を受賞し、また図録に掲載された拙論「朝鮮陶磁と浅川伯教」は優秀論文賞をいただくことができたのは、望外の喜びであった。

就職後も立命館大学大学院の博士課程に在学しつつさらに調査、研究を続け、2013年には博士論文『近代韓国陶磁史研究——浅川伯教・巧兄弟の活動を軸として——』によって、立命館大学より文学博士の学位を授与された。本書は、この学位論文に加筆訂正を加え、2019年度の日本学術振興会科学研究費補助金（研究成果公開促進費〈学術図書〉、採択課題番号19HP5096）の交付を受けて出版するものである。博士論文の審査では、立命館大学大学院文学研究科の和田晴吾教授（主査、現・兵庫県立考古学博物館館長）、同大学院文学研究科考古学・文化遺産専修の木立雅朗教授（副査）、同大学文学部地域研究学域の高正龍教授（副査）、同大学文学部東アジア研究学域現代東アジア言語・文化専攻の庵逄由香教授（副査）の先生方にお世話になり、さまざまなご指導をいただいた。博士論文をこのような形で出版できることはひとえに先生方のおかげであり、心より感謝申し上げたい。浅川兄弟関連資料の収集や活用理解を示して常に応援してくださった大阪市立東洋陶磁美術館の出川哲朗館長のご助力も、忘れることができない。また、大学時代の恩師である弓場紀知先生には、一貫して常に温かくご指導していただき、心より感謝申し上げたい。

韓国人である私が、日本において大阪市立東洋陶磁美術館の学芸員として、また研究者として仕事を続けてこられたのは、出川哲朗館長をはじめ、いつも適切な助言や助力を惜しまれない上司であり先輩でもある小林仁課長代理、職場の同僚、また日本、韓国、中国、台湾、欧米など国内外の研究者の先輩や友人らのおかげである。一人一人お名前を挙げることはできないが、この場を借りてあらためて感謝申し上げたい。

これからの韓国陶磁の研究は、より広い視野での研究が求められている。韓国陶磁と関連のある中国陶磁などの調査、研究も併せて進めつつ、微力ながら大阪市立東洋陶磁美術館にふさわしい韓国陶磁の研究を行うとともに、さらに魅力ある展覧会を企画して、多くの人々に韓国陶磁の魅力を伝えてい

ければと願っている。

本書の刊行にあたっては、株式会社思文閣出版の原宏一氏（現・小さ子社）と田中峰人氏、大地亜希子氏、そしてとりわけ中原みなみ氏には未熟な原稿を出版できる形に仕上げてくださいました。また表紙デザインは、いつも素敵なデザインで担当展覧会を支えてくださっている上田英司氏（シルシ）のお世話になった。この場を借りて、心からお礼申し上げたい。

最後に、大手企業の仕事を投げだして飛び込んだ日本での留学生生活を遠くからいつも見守ってくれている両親、私の代わりに長女の役割を背負わせてしまったすぐ下の妹、そしていつも明るく温かく応援してくれる二番目の妹と末っ子の弟にも感謝したい。

2019年12月 鄭 銀 珍

索引

* 韓国人名は韓国語読みを日本語の50音順に配列した。その他の語句は便宜的に漢字の日本語読みで配列した。

【事項】			
あ行			
アーツ・アンド・クラフツ運動	266, 349	開城	
アール・デコ博覧会	236	会寧	
愛知	104	改良	
アメリカ	10, 16, 17, 19, 24~36, 39, 43, 46, 48, 149~161	高嶺土（カオリン）	
有田	55, 60, 84, 119	化学工業博覧会	
淡路	60	化学薬品（物質）	
粟田焼	18	カトリック	
い行		株仲間	
伊勢	48, 61	韓国統監府	
伊藤陶器工場	122	韓国併合	
伊万里	59, 84, 108	鑑賞陶器	
う行		漢城美術品製作所	
ウィーン万国博覧会	18	贋物（偽物）	
ウエッジウッド	16	漢陽高麗焼	
薄物	30	閑楽窯	
ウルワース社	30	き行	
雲鶴帖	174, 214	岐阜	
え行		ギメ美術館	
エステティック・ムーブメント	17, 27, 30	行商人	
お行		京都	
尾張	43, 48, 55, 82, 87	吉良見窯	
か行		均一（性）	
外観	38, 44, 46, 59, 62, 63, 64, 73	金冠塚古墳	
海市商会	201, 208, 215	錦光山	
海市商店	209	金彩	
		金属器	
		く行	
		クリスチャン	
		クロム	
		け行	
		京義鉄道	
		京城工業学校窯業科	
		京城陶器株式会社	

京仁鉄道 148
 景德鎮 10, 39, 46, 52
 慶熙宮 294~296
 景福宮 294, 295
 京釜鉄道 148
 啓明会 306, 308
 鷄龍山 131, 222, 278, 285, 303, 305, 321,
 340, 401
 堅牢(性) 34, 65, 66, 74, 80, 83, 111

 こ行

 工業伝習所 121, 122, 180~185, 235
 工芸品 19, 115, 254, 282, 287, 390
 硬質磁器(陶器、等) 17, 32, 34, 35, 50, 111
 高敞 374
 甲申政変 77, 140, 144, 229
 貢人 116
 康津窯跡 166, 170, 303
 高麗磁器株式会社 122
 高麗青磁 3~5, 7, 8, 137, 143, 144, 148,
 151~153, 156, 159, 161, 164, 165, 168,
 175, 316, 319, 382, 393, 400, 406
 ——窯跡発見 166, 170
 ——狂時代 165, 395
 ——再現品 9, 11, 115, 178
 高麗茶碗 132, 136, 154, 297, 303~305,
 307~310, 319, 401
 高麗焼 162, 165, 228
 谷城 363
 古高麗美痕 5, 162, 164
 古蹟調査 137, 162, 253, 280, 331
 コバルト 94, 97, 98, 100, 105, 118, 224, 225,
 379
 コペンハーゲン 33

 さ行

 彩壺会(派) 287, 289
 雜貨店 76
 薩摩焼 31, 153
 サバル(サバリ) 6, 43, 57, 66, 68, 70, 74, 80,
 82, 85, 89, 93, 94, 97, 98, 104, 105, 107,
 110, 111, 114, 125
 三・一独立運動 262, 264, 331, 348, 352, 405

三星美術館 Leeum 151, 153
 三和高麗焼 116, 199~201, 203, 204, 207, 208,
 213, 216, 226, 236, 354

し行

嗜好 17, 27, 31, 37, 52, 66, 69, 73, 74
 自然 388
 志田焼 61, 93, 96
 実用品 4, 20, 51, 223
 ジャポニスム 3, 10, 18, 22, 24, 26, 160, 261
 純白(さ) 34, 35, 50, 71, 80, 93, 111, 125
 商標(票) 73, 74, 89
 植民地史観 8, 132
 食器のキズ 73
 白樺 253, 256, 257, 261, 269, 273
 新高麗焼 198
 壬午軍乱 137
 信州白樺派 273
 人物文 72
 信用 22, 23, 45, 63, 64, 74, 79

す行

瑞山公立普通高校 231
 スミソニアン博物館 134, 141

せ行

脆弱(性、等) 16, 17, 27, 30, 32, 34~38, 41,
 43, 46, 50, 51, 56, 60, 61, 65
 セーブル 33
 世界恐慌 20, 25, 92
 石炭窯 87, 89, 99
 石膏型 16, 100, 111, 118, 123, 125
 瀬戸 6, 16, 18, 19, 27, 34, 42, 43, 55, 57, 104~
 107, 133
 全国窯業品共進会 165, 272
 宣和奉使高麗図経 132, 137, 171

そ行

粗悪品 23, 57, 61~64, 73, 80
 装飾品 10, 16, 17, 20, 24~27, 30, 32, 33, 51
 贈答品(贈物) 196, 198, 223, 228, 395, 396
 相馬焼 26
 粗製(悪)品 4, 17, 18, 23, 30, 39~41,

索引

45, 46, 52, 57, 61~64, 73, 80
 ——濫造 10, 20, 33, 37, 38, 44, 46, 51, 64
 外山 60, 61
 松都 138, 142~144, 151

た行

第一次世界大戦 49, 52
 大英博物館 133, 299
 大師会 302
 対州 60
 対州窯 309, 311~313, 320
 大正名器鑑 304, 305, 308, 310, 311, 340
 大接（テチヨップ、タイチヨップ） 68, 70, 82, 105
 耐熱性 41
 拓殖博覧会 266
 多治見 61, 108, 109
 谷口陶器工場 122
 卵の殻 31

ち行

地方窯 12, 40, 52, 54, 115, 125, 325, 337, 347, 353, 357
 中国 35, 46, 52
 ——商人 76~79, 86
 朝鮮王朝実録 296
 朝鮮工芸会 380, 397
 朝鮮硬質陶器株式会社 50, 52
 朝鮮高麗磁器製造株式会社 230
 朝鮮古陶史料大展覧会 283, 313
 朝鮮総督府 8, 9, 11, 115, 121~123, 125, 212, 223, 280, 331, 351, 354, 360, 374
 ——中央試験所 121~123, 166, 185, 223, 225, 231, 232, 341, 385
 ——博物館 173, 174, 295
 朝鮮陶器研究会 306, 325
 朝鮮陶磁名考 12, 334, 336, 406
 朝鮮の膳 12, 336
 朝鮮白磁 3, 4, 5, 7, 8, 11, 120, 249, 260, 269, 401, 404
 朝鮮博覧会 207
 朝鮮（美術）工芸館 213
 朝鮮美術展覧会 115, 211, 220, 222, 264,

384, 387
 朝鮮美術品製作所 197, 208
 朝鮮民族美術館 265, 273, 276

て行

帝国美術院展覧会 258, 264, 265

と行

ドイツ（独逸） 33, 42, 46, 49~51
 東京大正博覧会 201, 257
 盗掘 5, 12, 47, 131, 137, 140, 142, 144~148, 164, 281, 398~401
 陶工 12, 54, 133, 134, 165, 325, 326, 337, 338, 341~343, 355, 360, 363, 389, 392
 統制（事業、番号等） 92, 95, 96, 98, 104, 126
 東大門運動場（遺跡） 69, 76, 83~87, 89, 95, 97, 98, 101, 102, 107, 109~111, 213

な行

内国勸業博覧会 85, 87
 名古屋 21, 107, 108

に 行

日用品 16, 17, 24, 26, 27, 32, 33, 41, 124
 日露戦争 48, 49, 121, 144, 146, 148, 291
 日清戦争 73, 78, 86, 87, 121, 137, 142, 291
 日朝修好条規 43~55
 日本陶器合名会社 5, 16, 34, 35, 49, 52, 111
 尿缶（ヨガン、便器） 66, 68, 70, 80, 82, 94~96, 98, 100, 101, 104, 114, 125

は 行

刷毛目 162, 274, 285, 316, 319, 338
 波佐見焼 61, 98
 パリ万国博覧会 19, 159, 300

ひ 行

美 4, 176, 289, 387
 ——の泥棒 405
 威厳の—— 270, 271
 線の—— 266, 268~270
 悲哀の—— 266, 268~271, 403, 404
 秘苑磁器 191

【人名】

			お行
			大河内正敏 287, 396
			岡倉天心 151, 161
			奥田誠一 270, 272, 285, 287, 297, 298
			奥平武彦 286
			オッペルト、エルンスト 140
			小野賢一郎 278, 305
			か行
			カールズ、ウィリアム 142
			海井弁蔵 209
			河井寛次郎 174, 261, 265, 372, 378, 405
			河瀬秀治 301
			幹山 126
			き行
			北村弥一郎 40, 230
			金容璫 230
			ギメ、エミール 299
			キヨソナー、エドアルド 299
			錦光山 126
			く行
			倉橋藤治郎 278, 286, 287, 306, 335, 382, 400
			グリフィス、ウィリアム 134, 149, 158
			黒田政憲 225
			こ行
			小泉顕夫 398
			ゴーランド、ウィリアム 135, 138, 139, 142
			後藤登丸 298, 397, 403
			小宮三保松 175, 186, 189
			小森忍 170, 267, 281, 287, 303
			小山富士夫 340, 345
			高裕燮 145, 232
			さ行
			佐野常民 301
			し行
			塩田力蔵 161, 169, 267, 287, 340
			ジャックマール、アルベール 132
あ行			
青山二郎	283, 404		
赤羽王郎	275		
赤星五郎	400		
赤星弥之助	300		
秋葉隆	331, 344		
浅川兄弟	10, 11, 115, 249, 266, 272, 274, 350		
浅川たか代	257, 264, 306		
浅川巧	4, 5, 9, 12, 15, 65, 171, 217, 250, 260, 262, 286, 306, 312, 334, 362, 389, 406		
浅川伯教	4, 5, 9, 12, 15, 64, 66, 117, 118, 142, 170, 171, 182, 233, 234, 250, 251, 257, 260, 262, 265, 271, 280, 281, 283, 284, 286, 287, 289, 292~295, 303~306, 310, 316, 325, 332, 342, 348, 353, 354, 380, 383, 388, 400, 406		
安倍能成	234, 389, 397		
鮎貝房之進	174, 394, 397		
アレン、ホレイス	139, 141, 142, 153, 160, 180		
アンダーソン、ウィリアム	299		
い行			
伊藤博文	121, 122, 165, 174, 186, 187, 395, 396, 401		
伊藤弥三郎	162, 165		
李能和	331		
李禧燮	283, 284		
李裕元	144		
今泉雄作	287, 303, 396		
今西龍	399		
今村鞆	328, 332, 336		
う行			
ウェーバー、ノルベルト	337		
ウォーナー、ラングドン	151, 312		
梅原末治	399, 402		
え行			
エッカルト、アンドレ	117, 160		

ジュイ、ピエール	134, 138, 139, 142, 337
松風嘉定	49
新海竹太郎	252, 257, 264, 289
す行	
末松熊彦	11, 166, 169, 170, 298
諏訪蘇山	179, 182, 189, 191, 228, 229
せ行	
関野貞	137, 162, 253, 292, 294, 399
善生永助	175, 331
千利休	303
た行	
高橋義雄 (箒庵)	287, 302, 304, 305
田辺泰	403
ち行	
池順沢	237
崔南善	331
崔冕載	384, 386, 387
鄭秉夏	119
て行	
寺内正毅	200, 205
と行	
土井浜一	381, 397
徳富蘆花	251, 253
富田儀作	179, 180, 185, 197, 199, 201, 203, 204, 207, 208, 213, 216, 217, 226, 235, 274, 354
富田幸次郎	152
富本憲吉	261, 265, 266, 349, 390
豊臣秀吉	133, 295
鳥居龍蔵	169, 170, 291, 328, 341
ドレッサー、クリストファー	26
な行	
中尾万三	170, 281, 287, 303
中島浩気	56, 57
仲西弥一郎	279

に行	
西村庄太郎	162, 165
蜷川式胤	135, 396
ね行	
根津嘉一郎	303
の行	
野村徳七	306, 401
野守健	173, 280, 340
は行	
バートン、ジョン	134
浜口良光	380, 397
浜田庄司	265, 350, 372, 378
濱田美勝	182, 200, 204, 205
濱田義徳	182, 200
バラ、チャールズ	158
韓寿景	231, 406
ひ行	
ピーターズ、サミュエル	156, 157
ビグロー、ウィリアム	151, 299, 301
平野耕輔	225
ふ行	
黄仁春	197
フェノロサ、アーネスト	150, 299, 301
藤田伝三郎	300
藤原銀次郎	303
プラット、ジョン	144, 157
フランス、オーガスタス	133
プランシー、ピクター	159
フリーア、チャールズ	152, 153, 156
プリンクリー、フランシス	135, 136
へ行	
ベルツ、エルヴィン	299
ヘンダーソン、グレゴリー	391
ほ行	
ホイット、チャールズ	152

索引

ホブソン、ロバート	157, 160, 288	柳宗悦	4, 5, 9, 11, 115, 171, 217, 249, 250, 256, 258, 261, 262, 266, 267, 270, 272, 286, 293, 294, 306, 334, 350, 372, 378, 379, 388, 403~405
ま行		山岡千太郎	174, 214
正木直彦	303	山口吉郎兵衛	303
真清水蔵六	165, 169, 170, 182, 228, 249, 272, 338	山田万吉郎	298, 397
益田孝	300, 302, 303, 311, 401	山中定次郎	156
繭山順吉	284	山梨半蔵	204
繭山松太郎	289	山本彦一	306
み行		山吉盛義	5, 161
三宅長策	146, 165, 394, 396	ゆ行	
ミルン、ルイーズ	149	ユーモルフォプロス、ジョージ	288
む行		柳根澁	182, 185, 197, 201, 235, 236, 354
村井文太郎	197	よ行	
村山智順	328, 332, 336	横井半三郎（夜雨）	303
村山龍平	306	横河民輔	303
も行		吉原三郎	175
モース、エドワード	135, 143, 150, 151, 157, 299, 301, 396	り行	
モリス、ウィリアム	350	リーチ、バーナード	260~262, 265, 266, 349, 350
森勇三郎	182, 183, 185, 208, 230, 340	れ行	
諸鹿央雄	402	レミオン、レオポルド	120
や行		ろ行	
矢上盛六	188, 196	ロダン	257, 258
八木契三郎	162, 166, 168, 249, 269, 292, 328, 340		

◆著者略歴◆

鄭 銀珍(じょん うんじん)

- 1973年 韓国に生まれる
2002年 来日、京都橘大学文学部文化財学科入学
2008年 立命館大学大学院文学研究科人文学専攻博士課程前期修了
2013年 立命館大学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期課程学位取得(文学博士)
2008年より大阪市立東洋陶磁美術館学芸員、現在に至る。
専門は東洋陶磁史、とくに韓国陶磁史。2017年、第38回小山富士夫記念賞(奨励賞)受賞。

[主要論文]

- 「朝鮮陶磁と浅川伯教」(『浅川伯教・巧兄弟の心と眼——朝鮮時代の美——』美術館連絡協議会、2011年)(美連協優秀論文賞受賞)
「近代における高麗青磁——再発見から再現へ——」(『陶説』第735号、2014年6月)(『陶説』創刊六十周年記念論文 朝鮮陶磁部門 優秀賞受賞)

かんこくとうじし たんじょう こうじ
韓国陶磁史の誕生と古陶磁ブーム

2020(令和2)年2月22日発行

著者 鄭 銀珍
発行者 田中 大
発行所 株式会社 思文閣出版
〒605-0089 京都市東山区元町355
電話 075-533-6860(代表)

装 幀 上田英司(シルシ)
印 刷 西濃印刷株式会社
製 本

©E. Jung 2020

ISBN978-4-7842-1983-4 C3072